

日中同形同義語のコロケーションに見られる両言語間での非対称性

宣 方園

京都大学大学院人間・環境学研究科

xuan.fangyuan.24m@st.kyoto-u.ac.jp

概要

本研究では日中両言語間で同じ共起語をとれない S 語（日中同形同義語）のコロケーションの特徴を明らかにするために、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、判断テストを通して、日本語では成立する S 語のコロケーションにおいて、中国語では同じ用法が使えるかどうかを調査した。その結果、「日中両言語で同じ共起語がとれない」と判断されたコロケーションは異なり数 118 例で、全体の 16.12%であった。また、日中両言語で同じ共起語がとれないコロケーションの特徴として、5 つが確認された。

1 はじめに

日本語の語種は、大きく和語、漢語、外来語、及び混種語の 4 種類に分けることができる。その中で漢語は約 5 割を占めると言われている。文化庁[6]は、約 2000 個の漢語を調査し、日中両言語の意味関係に基づき、漢語を表 1 の通り 4 種類に分類した。

表 1 文化庁[6]による漢語の分類

分類	定義
S (Same)	日中両言語における意味が同じか、または、きわめて近いもの。
O (Overlap)	日中両言語におけるが一部重なってはいるが、両者の間にずれのあるもの。
D (Different)	日中両言語における意味が著しく異なるもの。
N (Nothing)	日中両言語における日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの。

日中同形同義語（S 語）は日中両言語で形も意味も同じため、中国語を母語とする日本語学習者にとって学習しやすいと言われている[1, 9]。一方、S 語であっても日中両言語間で共起関係や使用制限と

いった用法が異なる場合があり、上級・超級日本語学習者にとっても、S 語のコロケーションを正しく用いることは非常に難しい[3, 7, 8]。例えば、中国人学習者の作文において、「*入学試験に参加する」、「*スピードを増加した」のように、日中両言語で共通する中国語語彙からの干渉による誤用がしばしば見られる。また、Nesselhauf[11]は母語の連語形式は第二言語に転移しやすいため、母語と第二言語の一致しないコロケーションの誤用率が高いと指摘した。

これまでの S 語のコロケーションに着目した研究では、学習者の誤用を分析したり、母語知識や習熟度がコロケーションの習得に及ぼす影響を分析したりすることが多い。一方、S 語のコロケーションにおいて、学習者は日中両言語で用法が一致するかどうかをどのように判断しているのか、漢語の分類が学習者の判断に影響するかどうかについては十分に検討されていない。

そこで本研究では、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、判断テストを通して、日本語では成立する S 語のコロケーションにおいて、中国語では同じ用法が使えるかどうかを調査する。そこから、日中両言語間で同じ共起語をとれない S 語のコロケーションの特徴、また、中国語をそのまま転用したり、日中で類似した意味を持つ言葉を使ったりする誤用が生じる場合、なぜ中国人学習者がこのような誤用を犯すのか、について検討する。本研究の成果は、日本語教育の分野のみならず、機械翻訳等の誤り分析にも応用できるものとして期待される。

2 調査方法

2.1 調査協力者

調査協力者は日本の大学に在籍する学生 7 名である。調査協力者の日本語学習歴は平均 6 年 5 ヶ月であり、3 ヶ月から 5 年間の日本滞在経験があった。

全員 JLPT N1 に合格した上級学習者である。

2.2 S 語コロケーションの抽出

本研究で使われた S 語コロケーションの抽出手順は以下の通りである。本研究では、旧日本語能力試験の『出題基準』[2]における 2~4 級の語彙を調査の対象とした。

まず、2~4 級の語彙を UniDic で形態素に分け、品詞「名詞-普通名詞-サ変可能」に該当するサ変動詞を抽出した。次に、文化庁[6]および張[5]に基づいて、S 語かどうかの判定を行い、S 語サ変動詞のリストを作成する。その結果、S 語サ変動詞を 172 語抽出された。それらの語のうち、2 級の語彙は 145 語、3 級は 21 語、4 級は 6 語であった。

続いて、『NINJAL-LWP for BCCWJ』[10]を用いて、先ほど作成した S 語サ変動詞のリストに基づき、格助詞「を」「が」「に」「で」を含む S 語のコロケーションを抽出した。ここでは、分析の対象を典型的なコロケーションのみに絞るため、頻度 5 以下及び MI スコア 3 以下のコロケーションは対象外とした。前述したように、本研究では漢語の分類が日中両言語で S 語コロケーションの用法における共通性の判断結果に及ぼす影響について検討するので、コロケーションを構成する名詞は二字漢語に限定した。

このようにして、『NINJAL-LWP for BCCWJ』[10]により抽出された S 語のコロケーションは異なり数で 3,107 例であった。そのうち、2 級の S 語のコロケーションは 2,773 例、3 級は 307 例、4 級は 27 例であった。

2.3 漢語の分類による S 語のコロケーションのパターン

本研究では S 語コロケーションを構成する名詞における漢字の分類を文化庁[6]および張[5]に基づいて判定した。

文化庁[6]は 3 種類の初級・中級教科書（計 10 冊）の中から、約 2,000 語の漢語を抽出した。日中両言語の漢語の意味関係に基づき、抽出した漢語を S 語、O 語、D 語、N 語の 4 つに分類した。張[5]は『漢日辞典』と『広辞苑』の中から、日中両言語で同一表記の漢語を集計し、約 1 万 1 千語の単語を収録している。なお、本研究では、漢語の分類方法及び分類表記は文化庁[6]が用いたものをそのまま踏襲した。

以上、2 つの分類基準から、コロケーションを構成する名詞の漢語分類の組み合わせは、表 2 の 25 パターンに分けることができる。

表 2 名詞の漢語分類による S 語コロケーションのパターン

文化庁 張	S	O	D	N	φ
S	「S, S」	「O, S」	「D, S」	「N, S」	「φ, S」
O	「S, O」	「O, O」	「D, O」	「N, O」	「φ, O」
D	「S, D」	「O, D」	「D, D」	「N, D」	「φ, D」
N	「S, N」	「O, N」	「D, N」	「N, N」	「φ, N」
φ	「S, φ」	「O, φ」	「D, φ」	「N, φ」	「φ, φ」

注：左は文化庁[6]による判定結果、右は張[5]による判定結果。φ は辞典において判定結果の掲載がないことを示す。

また、文化庁[6]および張[5]において、漢語に対する分類の結果が異なる、または判定結果が掲載されていない場合がある。そのため、文化庁[6]と張[5]での判定結果が異なる場合、次の判定基準に従って漢語の分類を判定する。

- ① 張[5]における判定結果を優先する。
- ② 張[5]における判定結果の掲載がない場合、文化庁[6]の判定結果に従う。

以上のように、文化庁[6]と張[5]による漢語分類の判定結果は表 3 に示す。

表 3 文化庁[6]と張[5]による漢語分類の判定結果

文化庁 張	S	O	D	N	φ
S	S	S	S	S	S
O	O	O	O	O	O
D	D	D	D	D	D
N	N	N	N	N	N
φ	S	O	D	N	φ

2.4 日中両言語で同じ共起語をとれるかどうかの判断基準

日中両言語で S 語のコロケーションの用法が一致するかどうかを明らかにするために、S 語コロケーションを中国語に直訳した場合、そのコロケーショ

ンが中国語で成立するかどうか、つまり、S 語コロケーションにおいて日中両言語で同じ共起語をとるかどうかを、中国語を母語とする日本語学習者に判定してもらった。それぞれのコロケーションを7名が判定し、最終的な結果は、多数決で決定した。

先に述べたように、S 語は意味と字形において日中両言語でほぼ一致しているため、中国語を母語とする日本語学習者、または日本語を母語とする中国語学習者にとって習得しやすいと考えられている。しかし、コロケーションにおいては日中両言語で必ずしも一致しない。本研究で、S 語名詞にあたるものは「S, S」「O, S」「D, S」「N, S」「φ, S」「S, φ」の組み合わせによるもので、これと「S 語サ変動詞」のコロケーションは、母語をそのまま転用すると、片方で成立しない場合に誤用となる可能性がある。そこで、本研究では分析対象を「S 語名詞+S 語サ変動詞」タイプのコロケーションに絞り、日中両言語で同じ共起語がとれるかどうかの判断結果について検討する。なお、上記の組み合わせのうち、「S, S」パターンは宣[4]において、調査を行っているので、今回の分析対象から除外した。

判定は次のような形で行った。S 語のコロケーション「声明を発表する」を例にとると、これを中国語に直訳すると『发表声明』となり、中国語でそのまま成立する。一方、S 語のコロケーション「他人を信用する」の場合、これを中国語に直訳すると『*信用他人』となり、中国語では成立しない。なお、日本語のコロケーションと同じ意味を表す中国語のコロケーションは『信任他人』となる。

3 結果及び考察

まず、抽出した S 語コロケーションの内訳について報告する。『NINJAL-LWP for BCCWJ』[10]より抽出された S 語コロケーションは異なり数 3,107 例あった。漢語分類による各パターンで S 語のコロケーションの異なり数を表 4 に示す。25 パターンのうち、実際に抽出された S 語コロケーションは 18 パターンに留まった。「S, D」「O, D」「S, N」「O, N」「D, N」「N, N」「φ, N」のパターンにあてはまる例は見つからなかった。

調査の結果、抽出された「S 語名詞（「S, S」除外）+S 語サ変動詞」というタイプの S 語コロケーションは異なり数で 732 例あり、そのうち「日中両言語で同じ共起語がとれる」と判断されたコロケー

ションは異なり数で 614 例、全体の 83.88%であった。

表 4 各パターンで S 語コロケーションの異なり数の内訳

文化序張	S	O	D	N	φ	計
S	1,279	18	8	33	561	1,899
O	171	71	29	17	94	382
D	0	0	6	52	3	61
N	0	0	0	0	0	0
φ	112	1	4	183	465	765
計	1,562	90	47	285	1,123	3,107

調査協力者によって「日中両言語で同じ共起語がとれない」と判断されたコロケーションは異なり数で 118 例、全体の 16.12%であった。これにより、中国語を母語とする日本語学習者が S 語のコロケーションを誤用する可能性は決して低くないと推測できる。パターンごとの判定結果を表 5 に示す。7 名の調査協力者間での κ 係数は 0.244 であった。

表 5 パターン別の内訳

	「O,S」	「D,S」	「N,S」	「φ, S」	「S, φ」	計
同じ共起語がとれるコロケーション	12	7	21	478	96	614
同じ共起語がとれないコロケーション	6	1	12	83	16	118
合計	18	8	33	561	112	732
差異率	33.33%	12.50%	36.36%	14.90%	14.29%	16.12%

日中両言語で同じ共起語がとれない S 語コロケーションのうち、異なり数が 3 例以上の S 語は「担当する」、「実施する」、「成立する」、「拡大する」など、11 語あった。また、コロケーションを構成する名詞において、2 回以上出現した単語は「分野」、「事項」、「趣旨」、「業務」など 20 語であった。

S 語コロケーションにおいて、日中両言語で同じ共起語がとれないコロケーションの特徴として、以下の 5 つが確認された。

① 日中両言語でコロケーションを構成する動詞または名詞の品詞がずれる。

例えば、「均衡が成立する」のような例が該当する。「均衡」は日本語で名詞として用いることができるが、中国語では形容詞としてしか用いることができない。このようなコロケーションを正しく産出することは中国語話者にとっては困難だと考えられる。「均衡的なことが成立する」という非自然な表現を産出してしまふ可能性があるため、注意して教える必要があると思われる。

② 同じ意味で、中国語では別の動詞に置き換えるべきである。

例えば、「画面を拡大する」という例は、中国語で『*扩大画面』とは言えず、同様の意味では『放大画面』となる。中国人学習者が母語の知識に依存し、コロケーションを産出する際に中国語をそのまま転用し、誤用を生じさせる可能性が高いと考えられる。そのため、日中両言語において、S語であっても同じ共起語を使えるコロケーションと使えないコロケーションがあることを明示的に教える必要がある。

③ 日中両言語で意味と品詞が同じであるが、コロケーションで使える範囲が異なる。

同じ共起語がとれないS語コロケーションのうち、例えば「実施する」で使われているコロケーションは14例見つかった。この語のコロケーションのうち、日本語では「体操を実施する」や「試験を実施する」と言うことができる、このように日本語では「実施する」という動詞は幅広い意味範囲で使われている。しかし、中国語では「実施する」は「政策」「法令」など、限られた単語としか共起しない。これまでと反対に、このような語は母語の例よりも広い範囲で使わなければならないため、習得が難しいと考えられる。このような使用範囲が異なるコロケーションをリスト化し、教材として提供すれば日本語教育の現場での指導に役立つものと考えられる。

④ 中国語には存在しない言葉、つまり、日本語特有の言葉が使われている。

例えば、「知事」のような語の場合、中国語には対応している役職名が存在しない。このような日本語独自の語句は注意する必要がある。

⑤ 現代日本語では使用されているが、現代中国語ではあまり使われていない言葉が使われている。

例えば、「分野」や「趣旨」のような語が該当す

る。これらの語は日本語では日常的に使われる語であるが、現代中国語ではあまり見られないものであり、先の日本語独特の語と同様にリスト化して、指導することが有効であると考えられる。

以上、見てきたようにS語であっても、日中両言語で使用状況が異なる場合が多数観察された。特に、最初の3つは細かな用法の違いを理解する必要あるため、さらに細かい分析が必要である。一方で、④や⑤のように両言語の語彙の差によるものは、リストによって指導することが可能であり、一度教えれば単語とともに記憶にも残りやすく、学習者が正しく把握しやすいものであると思われる。

4 おわりに

本研究では中国語を母語とする日本語学習者による判断テストを通して、日本語で成立する語のコロケーションにおいて、中国語でも同じ用法が成立するかどうかを調査した。その結果、「日中両言語で同じ共起語がとれない」と判断されたコロケーションは異なり数で118例、全体の16.12%であった。また、日中両言語で同じ共起語がとれないコロケーションの特徴としては、以下の5つの特徴が挙げられる。①日中両言語でコロケーションを構成する動詞または名詞の品詞がずれる。②同じ意味で、中国語では別の動詞に置き換えるべきである。③日中両言語で意味と品詞が同じであるが、コロケーションで使える範囲が異なる。④中国語には存在しない言葉、つまり、日本語特有の言葉が使われている。⑤現代日本語では使用されているが、現代中国語ではあまり使われていない言葉が使われている。

今後は、日中両言語で語コロケーションの習得と習熟度との関係をさらに細かく調査し、コロケーションの難易度についての分析が求められる。

謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものです。

参考文献

1. 加藤稔人 (2005) 「中国語母語話者による日本語の漢語習得——他言語話者との習得過程の違い」『日本語教育』(125), 96-105.
2. 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (編) (2002) 『日本語能力試験出題基準<改定版>』凡人社.
3. 小森和子・三國純子・徐一平 (2012) 「中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得：中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較」『小出記念日本語教育研究会論文集』(20), 49-61.
4. 宣方園 (2022) 「日中同形同義語コロケーションにおける日本語・中国語間の差異の調査」中国語話者のための日本語教育研究会第 52 回大会, 東京, 2022 年 9 月.
5. 張淑榮 (編) (1987) 『中日漢語対比辞典』ゆまに書房.
6. 文化庁編 (1978) 「中国語と対応する漢語」『日本語教育研究資料』大蔵省印刷局.
7. 三國純子・小森和子・徐一平 (2015) 「中国語を母語とする日本語学習者の漢語連語の習得：共起語の違いが誤文訂正に及ぼす影響」『中国語話者のための日本語教育研究』(6), 34-49.
8. 三喜田光次 (2007) 「名詞と動詞の共起関係に見られる日中両国語間の相違について」『外国語教育：理論と実践』33, 1-17.
9. 李愛華 (2006) 「中国人日本語学習者による漢語の意味習得——日中同形語を対象に」『筑波大学地域研究』26, 185-203.
10. 国立国語研究所・Lago 言語研究所 『NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)』(引用日：2022 年 5 月 10 日)<http://nlb.ninjal.ac.jp/>
11. Nesselhauf, N. (2003) The Use of Collocations by Advanced Learners of English and Some Implications for Teaching. Applied Linguistics, 24(2), 223-242.